

小倉進平の講義ノートと柳應浩について

浜之上幸
神田外語大学

I. 本講義ノートについて

朝鮮語学を中心に、14冊の著書と134編の論文を著した、日本における朝鮮言語学史に屹立する巨人である小倉進平(1882-1943)について、河野六郎(1975:1)は：

朝鮮の解放以後、韓国においても、北朝鮮においても、流石に自国の言語のこととて、朝鮮語の研究は精力的に行われ、質量ともに着々と成果を挙げている。けれども、事実、朝鮮語の科学的研究の礎石は主として日本の先覚者の手によって置かれたと言い得るのである。かかる先覚者の中にあつて故小倉進平先生の業績は最も意義深いものであつた。

と述べている。

その一方では、鄭承喆(2010:27)が：

…小倉進平は20世紀現代言語学の中心概念(共時と通時、体系等)を講義しましたが、それを自らの講義と研究に反映させることはできませんでした。このようなことから、彼の韓国語研究を現代言語学の水準に至ることができなかつたといふことができます。もちろんだからといって、彼が調査整理した基礎資料が、韓国語言語学の発展に大きく寄与したといふことは明らかなことです。

と述べたように、小倉進平の言語学的理論の水準を低く見る観点もあるが、朝鮮語の言語事実を綿密に観察し、記述を行った偉業は決して色あせる物ではない。

さて、ここで紹介する小倉進平の講義ノートは、その表紙からわかるように、氏が東京帝国大学文学部言語学科に主任教授として在職中であった昭和10年(1935年)に、「Altai 諸語ト朝鮮語」という題目で行つたものであり、ノ

一トを記したのは、当時、東京帝国大学文学部言語学科に在学していた朝鮮人学生である柳應浩(以下のⅡにおいて詳述する)である。

この「Altai 諸語ト朝鮮語」という講義内容は：

- 第一章 総論
- 第二章 Altai 諸語ト朝鮮語
- 第三章 Altai 語と朝鮮語の音韻比較
- 第四章 Altai 語と朝鮮語の語彙比較
- 第五章 Altai 語と朝鮮語の語法比較

という構成であったが、本ノートは、第一章の総論部分の第1節はじめのみが記されている。章立て(一部乱れがあるので浜之上が補正した)は：

第1節 Ural Altai 語族

(A) Ural 語族ノ名称

- (1) Hongrois
- (2) Wogulisch
- (3) Ostjakisch
- (4) Sgrjänische
- (5) Wotjäkische
- (6) Tscheremissische
- (7) Mordwinisch
- (8) Ostseefinnisch
- (9) Lappisch
- (10) Samojedisch

(B) Altai 語族ノ現状

- (1) Turko-Tatars
- (2) Mongolisch
- (3) Tungus

(C) Ural-Altai 語族中主タル言語ノ特質及ビソレラノ言語ト他ノ言語語族トノ関係

- (1) Ural 語族ノ方
 - 1) Hungary 語ノ特質
 - 2) Finnisch ノ特質
 - 3) Samojed ノ特質
 - 4) Ungarisch ト Finnisch トノ関係

5) Finnisch ト他語 トノ関係

6) Samojed ト他語 トノ関係

(2) Altai 語族ノ方

1) Türkisch ノ特質

2) Mongolisch ノ特質

のようになっており、かつてのいわゆる“ウラル＝アルタイ語族”という括り方からの講義であったことが分かる。ノートの記述が第2章以降の朝鮮語の分析まで及んでいないのが誠に残念である。

II. 柳應浩について

1. 経歴

1911年8月14日、忠清南道公州において、晋州柳氏錫泰と、母蘇仲康の間に生まれた。徽文高等普通学校と山形高等学校を経て、1935年東京帝国大学文学部言語学科を卒業した。卒業論文の題目は、「唇軽音研究」であった。朝鮮半島に戻った後には、恵化専門学校と京城帝国大学予科講師をつとめ、解放後は、ソウル大学校文科大学言語学科の初代主任教授を務めた(1946-1950)。朝鮮戦争のさなか朝鮮民主主義人民共和国に行き、金日成大学語文学部の教授をつとめたが、1950年代末に粛清された。1960年代末、平壤の金亨稷師範大学英語科教授として復権し、1994年83歳で死去した。後に、2011年11月18日、韓国の東崇学術財団により“今年の言語学者”として選定された。

2. 業績

1) 1930年代の植民地時代における研究

①1936.6. 「言語의 形態」 『正音』 14.

②1936.8. 「言語發達의 本質에 關한 概觀」 『正音』 15.

③1936.12. 「音韻法則에 關하여(一)」 『正音』 17.

上記の3篇の論文は、柳應浩が東京帝国大学を卒業して京城に居を移し、朴勝彬が率いる「朝鮮語学研究会」において活動しつつ、その機関紙『正音』に発表したものである。

①は、고영근(2001: 250-257)に要約がされているが、大まかに言えば、19世紀的な形態論中心の言語類型論(孤立語、膠着語[この論文では“添加語”と呼ぶ]、屈折語、抱合語の4種)の紹介から出発して、その類型を以下のように細分化して具体的な言語の例を挙げている：

(一) 添加語

- (1) 純粹添加語……日本語, 現代朝鮮語
- (2) 從屬的添加語……トルコ語, 古代朝鮮語
- (3) 並列的添加語……バントゥー語

(二) 屈折語

- (1) 語根的屈折語……アラビア語
- (2) 語幹的屈折語……ギリシア語, ラテン語, 英語, ドイツ語, フランス語

(三) 孤立語

- (1) 語根的孤立語……中国語, ベトナム語, タイ語, チベット語
- (2) 語幹的孤立語……サモア語

(四) 抱合語……アメリカインディアン語, グリーンランド語

ここで興味深いのは, “現代朝鮮語”と“古代朝鮮語”をそれぞれ, “純粹添加語”と“從屬的添加語”として別の類型に分類していることである. この分類の根拠として柳應浩は, “古代朝鮮語”がトルコ語のように, 母音調和の法則(例えば体言語幹の母音のタイプに助詞の母音のタイプが從属する)を持っていたことを強調している.

②は, ヘルマン・パウル(Hermann Paul)が 1880 年に著した『言語史原理(Principien der Sprachgeschichte)』の 1909 年の第 4 版, 第 1 章を朝鮮語に翻訳したものである.

その“訳者序”は, 以下の通りである:

現今の言語学が新興の勢力を持ち, 活気を持って発展しつつあるということは, 斯学に興味を持った人は誰しも同じく感じるであろう. 即ち, 言語に関する研究が科学的にその芽生えたのは, 18 世紀後半に至ってであるが, その当時には単にこの学問が単純な記述と, この記述から得ることができる法則の発見という事実だけに集中しており, その記述中に現れた諸言語現象に関して十分な理解を得ようとする真正な意味の科学にまでは発達できなかった.

このような真正な意味の言語学が形成されはじめたのは, 19 世紀末であったし, その急先鋒になったのは, かのドイツにおいて起こった青年文法学派の活発な運動であったが, 即ち音声研究及び心理的考察等の方法により言語の形態, 意義等の観察を深く行わなくてはならないと強調した彼らの主張から, 在来の言語学界についての革命の機運が起こりはじめた.

今、ここに訳述しようとする表題の論文は、以上の青年文法学派の一人であり、新興言語学の先祖とすることができる、「ヘルマン・パウル」の名著『言語史原理』中の第1章「言語発達の本質に関する概観」である。

即ち、「パウル」の見解は、言語史が言語学の全部であるとするところのように、歴史的研究の必然性を高唱しており、その歴史的推移条件になるものを明白にすることにより、歴史的発展を可能にさせる諸作用を探求することにある。そして、その原理論は、言語の構成理論のようなものではなく、外部から言語に作用する様々な物理的及び心理的要素の分析であり、またこのような要素が、各々独自の法則に従って、言語伝達という共同の目的に向かって作用するのに必要な条件になる諸現象の相互関係を研究するところにある。即ち、言語学を歴史科学の一つと見て、その方法的原理を心理的要素(言語の意義的方面)、及び物理的要素(音声的方面)の解明に置いた。

このような観点から叙述された氏の論文が、朝鮮語を研究するにあたっても方法的に多少の参考になることがあるであろうと信じ、訳出することになったところである。難澁な内容を訳述するにあたって、できる限りは説明的方法を取ったが、万一その内容を伝達するにおいて表現上不十分な点があるとなれば、読者諸氏の是正を望むものである。

③は、“その一”だけ出た未完の論文であり、2つの章からなる。

第1章は、“音韻法則の意義及び性質”と題されている。古代インド語、ギリシア語、ラテン語、近代英語、近代ドイツ語、近代フランス語の間において、母音や子音が規則的に対応している例を示した後に、以下のように述べている：

以上、言語変化の規則性及び、これを前提として設定した音韻法則に関し、その大略を説明したが、即ち音韻法則は言語変化の形跡を回顧し要約したものとして単に経験的価値を持つだけであり、何ら必然的效果を持ったものではない。この点において音韻法則が自然科学の法則と全くその性質を異にする所以である。従って、この音韻論上の法則というものは、必ずそうでなくてはならない必然の法則でもなく、または、当然そうでなくてはならない当為の法則でもない。ただ、一般的傾向がそうなるであろうという可能性を蓋然的に規定した可能の法則である。人間は、自由意思があり、または必要に応じ行動するものであるので、以前に便利に思っていたものも、後に至って様々な事情によって不便に感じる時には、わざわざそのようにしようとはしない。

そして、朝鮮語の例として、唇軽音「ㄹ」の変化を挙げている。つまり、글밭→글밭(文), 더워서→더워서(暑くて)等のように中期朝鮮語の「ㄹ」が現代朝鮮語で母音化しているが、この音韻変化が絶対的ではないことは、方言によっては더워서→더워서と発音されることからわかる。即ち、音韻法則には、方言または時代によって常に例外が起こる。従って、音韻現象という文化科学的蓋然の「法則」は、自然現象を支配する「法則」とは異なって動揺性があるので、事実上は「原則」あるいは「原理」とするのがむしろ妥当であるかもしれないと述べている。

第2章は、“一般音韻法則及び特殊音韻法則”と題されている。“一般音韻法則”は、人類言語に共通した音韻変化が可能であることを表示する原理である。従って、このような原理に照らして個別的音韻変化の原因を究明し説明することができるとする。

その例として、スイスの方言学者ウィンタラー(Johann Winterer)の法則、即ち“同音が重出する時には共通の動作を二回行わず、一回行う”という法則を挙げる。例えば、朝鮮語において、나아가서→나가서(進んで), 독기→도끼(斧)といった母音や子音の重出が一回の発音になるとしている。“一般音韻法則”のさらなる例として、“順行同化”である일년[일련](一年)、“逆行同化”である신라[실라](新羅)、“相互同化”である가이→개(犬)を挙げる。これ以外に、音韻相通、長音化、音韻脱落も“一般音韻法則”としている。

これに対し、“特殊音韻法則”は、一定の時代や各方言に限った具体的特殊音韻法則である。その例として、印欧語における“グリム(Jacob Grimm)の法則”を挙げた。

そして、“一般音韻法則”と“特殊音韻法則”の相関性を、前者が単にある可能性を与えるのに過ぎず、必然性を表示し得ないのに対して、後者は歴史的資料のように具体性を持ち、このことによって初めて言語現象の歴史的必然性が現れるとしている。

なお、고영근(2001: 262-263)は、以上述べてきた柳應浩の1930年代の研究を含めたヨーロッパ言語学の朝鮮半島への受容の様相について、以下の6点にまとめている：

- (1)19世紀初めから20世紀の30年代までのヨーロッパ理論は、解説と翻訳によって我が国に受容された。このような仕事は解放前後を通じ、ほとんど柳應浩によって遂行された。
- (2)柳應浩は19世紀以来の言語の形態的分類についての様々な学者の見解を紹介したが、特にパウルの言語理論の翻訳と論文を通じて受容され、ソシュールの言語理論も我が国においては初めてその内容を知らしめた。

- (3)柳應浩は言語の形態的分類において、意義辞と形態辞の形式的関係と機能的関係に従った分類を試みることによって、同じ類型の言語も特徴が流動的であるという事実を究明した。
- (4)柳應浩は言語の形態的分類において、特に朝鮮語の添加的事実に注目し、現代朝鮮語は純粹添加語、中期朝鮮語は從屬的添加語とし、類型的特徴を明らかにした。
- (5)柳應浩はどの言語であれ、固定した類型的特徴がなく、ある特徴がより支配的なのかという点が重要であると語った。そして同じ言語も時代が異なれば、類型的特徴が変わると見た。
- (6)柳應浩は音韻法則の性格を究明し、一般音韻法則と特殊音韻法則を措定した。この場において、彼は朝鮮語の順行同化、逆行同化、相互同化の概念を明らかにした。

2) 1940年代の大韓民国における研究

- ①1946.10.「朝鮮語唇輕音에 관한 研究 : 특히 唇輕音「ㄹ」의 音價及變遷에 關하여」『民族文化』2.
- ②<言語学概論>(講義録)
- ③1949. 4.「現代言語學의 發達」『學風』2-3.
- ④1949.12.『基礎獨逸文典』東邦文化社.

①は、柳應浩の東京帝国大学における卒業論文の題目に通じるものである。筆者未見であるが、최경봉(2012 : 310-311)にその内容が以下のように紹介されている :

この論文において、彼は唇輕音‘ㄹ’の性質を有声の両唇摩擦音[w]に類似した音価を持ったものを見て、この音が以後、‘母音化’と‘子音化’の変遷を経るという点を明らかにした。方言を例にして、‘더버’が‘더워’と‘더뵈’の2通りに変遷したことを主張することは、現代的観点と非常に異なるが、中期朝鮮語資料を根拠に音韻変遷の特殊性を主張したことは、研究史的に意味がある。

また、唇輕音が母音化と子音化の変遷を経るということは、古代朝鮮語から唇輕音が存在したことを前提としたものであり、古代語の母音間の[*b]が2通りの発達をしたという仮説と対立しもある。古代朝鮮語に‘ㄹ’, ‘ㄷ’が存在したという論議を通じて見れば、彼の研究が持った研究史的意義を探り求めることができるであろう。

②も筆者未見であるが，최경봉(2012: 308)によれば，ソウル大学校文理科大学言語学科における柳應浩の1947年の講義録であり，金敏洙が記録したものであるという．この講義に関しては，金芳漢(2001: 44-45)に，“言語学概論”についての記述がある．以下，その記述を引用してみよう：

次に，記憶に残っているいくつかの講義を，回想してみることにする．まず，二年の時に必修であった，柳應浩先生の〈言語学概論〉を挙げないわけにはいかない．統辞に講義の方法は，教授が，あらかじめ作成しておいた講義ノートを，ゆっくり読んで，学生達がそれをノートに書き取るというものであった．教授の講義ノートは，後で一冊の本として出版されたりもした．大部分の講義は，そのような方式で進められた．言語学概論も例外ではなかった．ところで言語学概論は，速射砲講義として有名であった．教授がノートを読む速度が，あまりにも速いので，それを正確に書き取るのが，大変難しかった．受講者数は，相当多いほうだったが，それは語学・文学系列の学生が，多数聴講していたからだった．他の学科の学生たちは，講義ノートを整理するのが難しかったので，言語学科の学生達のノートを，よく借りていたことを記憶している．用語や内容が，彼らにとって少し不案内であり，また，速いことで有名な講義だったからである．言語学科の学生達すらも，書き取れない部分が相当にあるほどだった．私はその〈言語学概論〉の講義を大変印象深く記憶している．講義内容は，簡単な言語学史から始まるのだが，概論に含まれている学史としては，量も多く，水準も相当に高かった(その言語学史の部分は後に《学風》という雑誌に発表されもした)．その学史は，ギリシア及びローマ時代の言語研究について，簡単に言及した後，19世紀の言語学，特に古典比較言語学と青年文法学派を比較的詳細に説明し，その次に，フンボルト W. von Humboldt, シュタインタール H. Steinthal, ヴント W. Wundt, マルティエ A. Marty 等の心理主義をわかりやすく略述し，また，言語地理学及び美学的理想主義を扱っていた．その次は，新浪漫派 Neuromantiker とビューラー K. Buhler 等の言語心理学を説明し，フランス言語学の心理-生理・社会学的研究を紹介して終わっている．私はその講義を通して，言語を見る様々な観点と多様な研究方法，そして隣接した学問との連関性等を知るようになり，その知識は，次に言語学全体を見るのにも大きな助けとなった．そこで私は，わかりやすい言語学史を通して言語学の入門が可能であるということがわかるようになった．そのような趣旨で著述された代表的な例として，ディニー F. P. Dinneen の『一般言語学概論 An Introduction to General Linguistics』を挙げるができる．

③も筆者未見であるが、これは、上の引用にあるように、ソウル大学校文理科大学言語学科における柳應浩の“言語学概論”講義のうち、言語学史の部分を論文としたものである。

고영근(2001: 260-261)は、「6章にわたって19世紀中葉の青年文法学派から、ヴント(W. Wundt)、フォスラー(K. Vossler)を経てソシュールに至る現代言語学の発展過程を叙述したものである」として、6つの章を以下のように要約している：

1章においては、19世紀に至ってポップ(F. Bopp)によって比較言語学の基礎が固められ、それによって言語の歴史的研究が始められたとした。しかし、彼らは、記述と法則の発見にのみ没頭したので、真の言語科学は19世紀末から始まると明らかにした。

2章においては、パウルを現代言語学の先駆者と考え、彼の著書『言語史原理』(1880)を現代言語学の出発点と見なし、その内容を紹介した。柳應浩は“言語学は言語史”という命題をはじめとして、心理主義的言語研究、言語慣習、言語変化に関する重要概念を評説した。特に、パウルは音韻変化の研究に重きを置き、青年文法学派をして、“音韻法則に例外なし”というスローガンを掲げさせたと言った。

3章では、パウルの『言語史原理』について批判的態度を取ったヴントをはじめとして、マルティ(A. Marty)の言語理論を紹介した。パウルが実証的であるとすれば、ヴントは観念的であると、その特徴を規定した。

4章においては、ヴントとマルティの観点を適切に解説し、文体論を確立したフォスラーの言語美学を紹介して批判を加えた。

5章においては、ヴントの観念論を発展させた新浪漫派のカッシーラー(E. Cassirer)、ヴァイスゲルバー(L. Weisgerber)、ポルツィヒ(W. Porzig)の见解を紹介した。彼らは、言語を各民族の文化の鏡と見る点において、意見の一致を見せているとした。

6章においては、社会心理学の観点から言語研究の出発を試みたソシュール、バイイー(C. Bally)、メイエ(A. Meillet)、ヴァンドリエス(J. Vendryes)等のフランスの社会学派、その中でもソシュールの言語理論を詳細に説明している。ランガージュ、ラング、パロールの概念を紹介し、言語の本質的対象は、社会的事実であるラングであるという点を浮き彫りにしている。また、共時態と通時態を区別することによって、共時言語学の分野を創始した点も指摘した。柳應浩は、ソシュールの影響を受け言語地理学が発達し、続いてプラグ言語学派が誕生した事実も言及した。

なお、④については、金敏洙・河東鎬・高永根共編(1985)に再録されている。再録にあたって、高永根は次のように述べている：

本書は、初級用ドイツ語教科書として編纂されたものであり、主に独文法の初歩事項を学習させる目的で著述された。解放前に、英文法、ラテン語文法などは若干出たものがあったが、独文法はなかったことから推察してみると、本書が本国最初の独文法の著述ではないかと思われる。

3) 1950年代の朝鮮民主主義人民共和国における研究

- ①1955. 『언어학 개요』(P.A. Будагов(1953), *Очерки по языкознанию*, 류응호, 한영순 역)교육 도서출판사.
- ②1956. 4. 「조선어 어음론 강의(1)」『조선어문』2.
- ③1956. 8. 「조선어 어음론 강의(2)」『조선어문』4.
- ④1956.10. 「조선어 어음론 강의(3)」『조선어문』5.
- ⑤1956.12. 「조선어 어음론 강의(4)」『조선어문』6.

1950年、朝鮮戦争のさなかに北朝鮮に渡った柳應浩は、1955年に①(筆者未見)を刊行することで、研究活動を再開する。この翻訳書が刊行された背景について、최경봉(2012: 312)は以下のように述べている：

……彼は、1955年、大学の専攻教育用として、ソ連の言語学概論書である『언어학 개요(言語学概要)』を翻訳したことがある。この書籍の翻訳は、スターリンによってマール(H.Я. Марр)の理論が批判される中で、マールの言語理論を批判した言語学概論書が必要であった状況において成し遂げられたと見ることができる。金壽卿の主導によって1949年に翻訳した『언어학(言語学)』(A.A. Реформатский 著, *Введение в языковедение*, 1947年刊)は、大学の教育用として翻訳された本であったが、6年ぶりに同じ性格の概論書を翻訳したことは、当時の経済状況を考える時、常識的なことではなかったからである。2つの概論書は、『언어학』(1949)にマールの新言語理論が紹介されていた反面、『언어학 개요』(1955)にはマールの新言語理論についての批判が含まれているという点においてのみ違いを見せている。これは、当時この本の翻訳が成し遂げられた脈絡をよく見せてくれている。

また、간노 히로오미(1997: 363-364)によれば、「……解放後から1950年代にかけて、Реформатский, Будагов, Аванесовの言語学書が北朝鮮において紹介されたが、この他にも数多くの言語学書が入っていったものと推測される。

その当時、ソ連一辺倒の北朝鮮において、ロシア語熱がすごかったということと、1949年の“朝鮮語文法”に、すでにソ連文法学の影響を見ることができる点を考えれば、急速度にソ連の原書を受け入れたであろうということを推測することができる」とある。

なお、この Будагов 著の *Очерки по языкознанию* は、朝鮮語訳の刊行に1年遅れる1956年に、中国語訳が布達哥夫著『語言學概論』として、呂同崙、高晶齋、周黎揚の共訳により時代出版社から刊行されている。

②から⑤は、『조선어문』に連載された誌上講義であるが、以下、章立てを示してみることにする：

I. 朝鮮語語音論の対象と課題

II. 語音の3種類の側面

1. 声音の音響学的特性

ㄱ) 声音の概念

ㄴ) 声音の高低

ㄷ) 声音の強弱

ㄹ) 声音の長短

ㄱ) 音色

ㄷ) 楽音と騒音

ㄹ) 共鳴

2. 声音の生理的側面

発音器官とその作用

3. 声音の言語学的側面

音韻の概念

III. 朝鮮語語音の分類

1. 母音と子音

2. 有響音

3. 母音の分類

ㄱ) 口の開閉或いは舌の高低による分類

a) 高母音(閉母音)

ㄴ) 低母音(開母音)

b) 舌の高低或いは口の開閉が中間的な母音

ㄷ) 舌の位置の前後による分類

a) 前母音

ㄴ) 後母音

b) 中間母音

ㄷ)唇の形態による分類

a)円唇母音

ㄱ)非円唇母音

ㄷ)以上において母音を発するときの舌の位置の高低, 前後, 唇の形態などによって, 朝鮮語の母音を大別してみた.

a)前母音

(1)非円唇的なもの

(2)円唇的なもの

ㄱ)後母音

(1)非円唇的なもの

(2)円唇的なもの

b)中性母音

ㄷ)二重母音

4. 子音の分類

ㄱ)発音位置による分類

a)唇音

(1)両唇音

(2)唇歯音

ㄱ)前舌音

(1)舌面音

(2)舌端音

(3)舌端が上の歯茎に上がっていき, 舌面の前の部分が若干くぼみができるようにして出る音が, いわば[r]がそうである. ロシア語の P もこの部類に入るが, それは舌端が上に上がっていき曲がるものであり, 従って舌面の前の部分がよりくぼむので, 舌の形態が曲がる.

(4)[ㄷ], [ㄱ]などのように前舌面が歯茎の後ろ部分に着いて発音されるものもあり, ロシア語の III, 英語の [ʃ](ship[ʃip]) もこれとほとんど同じ位置で出るものである. 朝鮮語には該当する音がない.

b)中舌音或いは口蓋音

ㄱ)後舌音或いは軟口蓋音

ㄱ)懸壅垂音

e)咽頭音

ㄱ)喉頭音

ㄷ)発音方法による分類

a)破裂音或いは閉鎖音

6)破擦音

b)摩擦音

r)顫音

д)有気音

e)硬音

ㄷ)以上で、朝鮮語の子音をその発音位置と発音方法に従って分類したが、さてこれを総合すればより精密な分類を得ることができる。

IV. 語音の長さ

V. 音節

1. 音節と音節の区分

2. 音節のアクセント

VI. 力点

1. 単語の力点

2. 文章の力点

VII. 抑揚

VIII. 語音の変化

1. 結合的語音変化

ㄱ)語音同化

a)子音と子音間の同化

(1)ㄱが先行しその他の子音が後行する場合

(2)ㄴが先行しその他の子音が後行する場合

(3)ㄷが先行しその他の子音が後行する場合

(4)ㄹが先行しその他の子音が後行する場合

(5)ㄴ가先行しその他の子音が後行する場合

(6)ㄷ가先行しその他の子音が後行する場合

(7)ㄹ가先行しその他の子音が後行する場合

(8)ㅇ가先行しその他の子音が後行する場合

(9)ㅅ가先行しその他の子音が後行する場合

6)母音と子音間の同化

b)子音と母音間の同化

(1)《각오》《갑을》等のように、先行する音節が子音で終わり、これに続く音節が母音で始まるもの

(2)《도선》,《턴하》の《도》,《턴》等のように、1つの音節のはじめに子音があり、次に母音が続くもの

r)母音と母音間の同化

ㄴ)異化

2. 位置的語音変化

IX. 語音の交替

用言語幹が語尾と結合するときの語音交替現象

- 1)語幹の音が交替する場合
- 2)語尾の音が交替する場合
- 3)語幹と語尾の語音が共に交替する場合

上の場合に起こる語音の変化

- 1)無声音が有声音に変わるもの
- 2)無気音が有気音に変わるもの
- 3)平音が硬音に変わるもの
- 4)破裂音が摩擦音に変わるもの
- 5)破裂音が破擦音に変わるもの
- 6)破裂音が顫音に変わるもの
- 7)新たに音が添加されて変わるもの
- 8)子音が母音に変わるもの
- 9)ゼロ音に変わるもの
- 10)ゼロ音への交替と新たな音の添加が同時に起こるもの

X. 標準発音法

1)漢字語の発音上留意すべき点

ㄱ)初声にくる《ㄴ》が, ㄷ, ㄹ, ㄲ, ㅂ, ㅅ, ㅆ等と結合する場合

- a)単語の語頭に来的时候
- 6)単語の語頭以外の音節来的时候

ㄴ)初声に来る《ㄷ》が, 母音と結合する場合

- a)単語の語頭に来的时候
- 6)第2音節またはそれ以降の音節の初声来的时候

ㄷ)漢字音に2種類の音を持ったものを発音する場合

ㄷ)“不”は本来の発音である《ㅍ》と発音することを原則とするが、その後ろにㄷ, ㅅが来的时候は, 《ㅍ》と発音する。

2)固有朝鮮語の発音において留意すべき点

ㄱ)初声に来るㅍ, ㅅ, ㅆが ㄷ, ㄹ, ㄲ, ㅂ, ㅅ, ㅆと結合する場合

ㄴ)初声に来るㄷ, ㅌが ㄷ, ㄹ, ㄲ, ㅂ, ㅅ, ㅆと結合する場合

ㄷ)子音ㄱ, ㅋ, ㆁが母音《ㅏ》と結合する場合

ㄷ)ㆁ, ㄴ, ㄷ, ㅌが母音ㅏと結合する場合

ㄷ)パッチムまたは語尾の発音において留意すべき点

以上の章立てからわかるように、研究論文ではなく紙上講義という性質上、I～VIIIに関しては基本的な音声学の水準を超えるものではなかった。また、IXにおいては、用言語幹に語尾がついた場合の発音を、変格用言の場合を含めて解説しており、Xにおいては、正音法(orthoepy)について述べている。

【参考文献】

- 간노 히로오미[菅野裕臣](1997)「북한 문법학의 계보와 소련 언어학과의 관계(1945～1990)」『동방학지』 98, pp.353-417.
- 고영근(2001)『한국의 언어연구』 역락.
- 金敏洙・河東鎬・高永根共編(1985)『歷代韓國語文法大系』第2部第32冊，塔出版社.
- 최경봉(2012)「국어학사에서 柳應浩의 위상과 계보」『한국어학』 54, pp.291-324.
- 金芳漢(2001)『ある言語学者の回想』泉谷書店，岩谷道夫訳.
- 河野六郎(1975)「故小倉進平先生と朝鮮語学」『小倉進平著作集(四)』, pp.1-20, 京都大学国文学会.
- 鄭承喆(2010)「小倉進平の生涯と学問」『2009年度東京大学コリア・コロキウム講演記録』, pp.17-29, 東京大学大学院人文系研究科韓国朝鮮文化研究室.